奨学生レポート

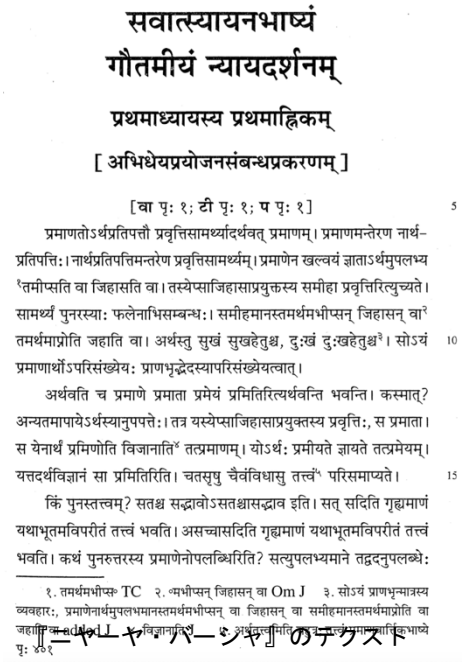
多田野奨学会　2023 年度第 1 号

岡拓杜（東京大学 3 年）

大人になるということ

―役に立つとか立たないとか―

東京大学には「進学選択」という制度があり、2 年間の教養課程を終えた後に、自分が進みたい専門課程を選ぶことができます。僕は今年の 4 月に文学部のインド哲学仏教学専修に進学し、今は「サンスクリット」というインドの古典語で書かれた文献の読解を通して思想史を学んでいます。例えば、今年の前期に受講した演習では、『ニヤーヤ・バーシャ』という論理学に関する注釈書を読んだり、『タットバ・サングラハ』というインド仏教の外界実在批判をするテクストを勉強したりしました。サンスクリットは名詞・形容詞や動詞が、ダイナミックに活用[1]するだけでなく、信頼して使える辞書が英語やドイツ語、フランス語のものしかなかったり、文献がデーヴァナーガリー文字（下の写真を参照）で書かれていたりするため、ラテン語や古典ギリシア語と比べても勉強するのに骨が折れる言語です。それから、仏教学を勉強しようと思えば、漢文はさることながら、チベット語やパーリ語もやっておく必要があります。また、先行研究などを読むためにはフランス語やドイツ語、ヒンディー語の習得が望まれるため、僕の学生生活は言語地獄と化しています。


सवात्स्यायनभाष्यं
गौतमीयं न्यायदर्शनम्
प्रथमाध्यायस्य प्रथमाह्निकम्
[अभिधेयप्रयोजनसंबन्धप्रकरणम्]
[वा पृः १; टी पृः १; प पृः १]
प्रमाणतोऽर्थप्रतिपत्तौ प्रवृत्तिसामर्थ्यादर्थवत् प्रमाणम्। प्रमाणमन्तरेण नार्थप्रतिपत्तिः। नार्थप्रतिपत्तिमन्तरेण प्रवृत्तिसामर्थ्यम्। प्रमाणेन खल्वयं ज्ञाताऽर्थमुपलभ्य [1]तमीप्सति वा जिहासति वा। तस्येप्साजिहासाप्रयुक्तस्य समीहा प्रवृत्तिरित्युच्यते। सामर्थ्यं पुनरस्याः फलेनाभिसम्बन्धः। समीहमानस्तमर्थमभीप्सन् जिहासन् वा[2] तमर्थमाप्नोति जहाति वा। अर्थस्तु सुखं सुखहेतुश्च, दुःखं दुःखहेतुश्च[3]। सोऽयं प्रमाणार्थोऽपरिसंख्येयः प्राणभृद्भेदस्यापरिसंख्येयत्वात्।
अर्थवति च प्रमाणे प्रमाता प्रमेयं प्रमितिरित्यर्थवन्ति भवन्ति। कस्मात्? अन्यतमापायेऽर्थस्यानुपपत्तेः। तत्र यस्येप्साजिहासाप्रयुक्तस्य प्रवृत्तिः, स प्रमाता। स येनार्थं प्रमिणोति विजानाति[4] तत्प्रमाणम्। योऽर्थः प्रमीयते ज्ञायते तत्प्रमेयम्। यत्तदर्थविज्ञानं सा प्रमितिरिति। तासु चैवंविधासु तत्त्वं[5] परिसमाप्यते।
किं पुनस्तत्त्वम्? सतश्च सद्भावोऽसतश्चासद्भाव इति। सत् सदिति गृह्यमाणं यथाभूतमविपरीतं तत्त्वं भवति। असच्चासदिति गृह्यमाणं यथाभूतमविपरीतं तत्त्वं भवति। कथं पुनरुत्तरस्य प्रमाणेनोपलब्धिरिति? सत्युपलभ्यमाने तद्वदनुपलब्धेः
१. तमर्थमभीप्स- TC ２. °मभीप्सन् जिहासन् वा Om J ３. सोऽयं प्राणभृन्मात्रस्य व्यवहारः, प्रमाणेनार्थमुपलभमानस्तमर्थमभीप्सन् वा जिहासन् वा समीहमानस्तमर्थमाप्नोति वा जहाति वा edited ４. विज्ञानाति ５. अर्थतत्त्वमिति [illegible] न्यायभाष्ये पृः २०१

『ニヤーヤ・バーシャ』のテクスト

本郷に進学して哲学を勉強するのは、高校生以来の夢でもあったので、膨大な予習に耐える辛さの反面、充実した日々を過ごしています。今のところ、研究者を志して大学院に進学する予定ですが、3 年生

---

[1] 名詞・形容詞は 1 単語あたり、（主格・呼格・対格・具格・与格・奪格・属格・処格）×（単数・両数・複数）＝24 曲用。動詞は 1 つの語根に対して、（1・2・3 人称）×（単数・両数・複数）×（現在形・過去形・願望形・命令形）×（能動態・反射態）＝72 活用が標準で、それに未来形や完了形、受動態、使役形、アオリストなどが加わる。

の時期になると就職活動を始める友人も多く、このまま就活をせずに学生を続けることに不安や戸惑いを覚えることもあります。そんな中で、社会人＝大人になることについて、いろいろと考えることがあったので、ここでは「大人になること」について、（社会の）役に立つかどうかという観点から論じてみたいと思います。

哲学は役に立つのか立たないのか

自己紹介をする際に「哲学を勉強しています」と言うと、「それは役に立つの？」という純粋[2]な疑問をいただくことがあります。この問いかけを、もう少し哲学風に洗練させてみると、「答えすら出せない問題に向き合う哲学は、実社会に対してどのように役に立っているのか、あるいは、そもそも役に立たないのか」ということになるでしょう。確かに（西洋哲学の文脈で言えば[3]）ソクラテス以来、哲学はいろんな問いを提示してきましたが、それに対する答えは――科学のように明確には――出ていません。多くの人がご存知のトロッコ問題についても、功利主義などの見解がありますが、（ニュートン力学における「運動の法則」のように）教科書的に哲学者が一致しているような一つの答えはありません。

僕は発問者や時々の思想/気分に応じて、二つの対極的な立場を使い分けることがあります。一つは哲学が世の中で一番役に立つという生意気な驕り高ぶり。もう一つは、哲学は役に立つ必要がないという開き直り。この子どもじみたと形容すべき二つの態度が僕の中には混在しています。ひとまず、これらの立場について以下で考察してみようと思います。

ドイツの哲学者カントは『啓蒙とは何か[4]』の中で啓蒙を「みずから招いた未成年の状態から抜け出すこと」と定義し、「知る勇気」について論じています。「大人になること」とは、カントにとって「自分の理性を使う勇気」を持つことでした。「未成年の状態」にある人は「他人の指示を仰がないと、自分の理性を使う決意も勇気ももてない」のです。学生であれば、保護者や先生の言われるがままに人生を選択していくこと、あるいは、「社会」という得体の知れないものが要請するがままに何となく学生生活を過ごし、「常識」の示す通りに人生を歩んでいくことが、「未成年の状態」に当たるでしょう。ところで、カントは主著『純粋理性批判』の中で、哲学それ自体は学ぶことができず、ただ「哲学する」ことのみ学べる

---

[2] 文系学部不要論のような、相手の存在価値を否定するような動機に基づくものではない点で、僕は「純粋」と理解している。面と向かって文学部は要らないという人は少ない。

[3] インド哲学を専攻している以上、哲学的営為をギリシア以来の西洋的伝統に限定するつもりはない。また、インドにおける哲学の地位は西洋とはやや異なるので、ここでは読者にとって比較的馴染みがあるだろう西洋哲学の文脈に限って論じてみたいと思う。

[4] 引用部は、カント『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他３編』中山元訳、光文社古典新訳文庫、2006 年による。

だけだと主張しています。このことから、哲学する＝自分の頭で考えることが、「未成年の状態」から脱するのに役立つのだと言えるのではないでしょうか。

哲学が役に立つことは、考えてみれば当たり前の事実です。もし、カントとかヘーゲルとかドゥルーズが書いた難解で仰々しい哲学書を読むこと（カントで言えば「哲学」そのものを学ぶこと）が哲学だと考えているなら、その態度は噴飯物でしょう。人は生きているうちに、何度も答えのない問いに出くわすことになります。それらの問いは、親族や親しい友人の突然の死、将来がおぼつかない中での人生選択などによって、いつも何の脈略もなくやってきて、大体の場合は、答えなど見つかるはずもないまま、「問い」そのものが忘れさられ、日常の中に埋没していきます。僕にとって哲学することとは、そういう日常の出来事であります。「答えのない」問いを考え続けることは、日常の営為であり、決して社会から乖離した営みではないのです。社会には「哲学者」と言われる人がいますが、彼らは何も浮世離れした存在ではなく、世間的な意味で「大人になる」までに受け流せるようになるはずの問いが気になって仕方がないだけなのです。

しかし、問いを忘れられなかったそのような「哲学者」たちの営為を「無意味」だとバカにすることが簡単なのと同じくらいに、それを大層なものとして、祀りあげるのもまた簡単です。僕の興味は、インド哲学の黄金期と言われる 5 ～8 世紀のインドにおける思想を基に、現代の哲学を構築することにあります。つまり、1000 年単位の時間軸の中で物事を考えようとしているわけで、10 年、20 年先に役立つことなどはほとんど考えていないと、威勢よく発言することがあります。1000 年という視野の中で人間存在について考えていきたいのだから、僕が考えたい哲学が役立つかどうかは、発問者が考えているような時間軸には当然、収まるはずがないという一つの答えは、まさに哲学を、他の「役に立つ」「卑近な」営みとは異なり、「役立に立たない」「別格」な学問として、権威付けることになるでしょう。これは上述した、哲学を特権視し、役に立たなくて良いと開き直る態度に当たります。

ここまで、二つの対極的な見解を示してきました。一つは、哲学が非常に日常的な営みであり実社会に役に立つということ、それから、哲学は日常の時間を超越した、役に立たなくて良い営みであるということです。ここで、両者の中間にあるようなひとまずの結論を次の議論の足掛かりとして、示しておきましょう。

僕は思想が人を殺し得るということに大変な恐怖を抱いています。例えば「アーリア人」の優生を説くヒトラーの「思想」は、ホロコーストに繋がりました。それから、最近、興味深く読んでいる京都学派の田辺元という哲学者は、太平洋戦争期に学徒出陣で戦場へと赴く学生に向かって、国家のために死ぬことについて力強く語った[5]と言います。人間は本来、

---

[5] 田辺の「種の論理」は次第に国家主義的傾向を伴うようになり、学生の戦意を鼓舞した『歴史的現実』につながった。その反省・挫折から懺悔道の哲学、死の弁証法へと向かう。

簡単には人を殺さないし、自ら死に向かって歩いていくことはしません。それにもかかわらず、「思想」があると、人は簡単に何人もの命を奪うことができてしまいます。これまで「思想が強い」ことを危険視する数多くの人に僕は出会ってきました。しかし、「思想が弱い」から、危険な強い思想に飲み込まれていくのです。だから、僕らは、人を殺しかねない思想に対抗できるような魅力的で健全な思想を育まないといけないし、それは「思想が強い」哲学にしかできないのだと考えています。

世界の無意味性について

ここまで、さまざまな「理論」を構築して、雄弁に哲学を擁護してきましたが、ここで、すべての議論を根底からひっくり返してみようと思います。哲学が役に立つとか、立たないとかは、よく考えると大変ナンセンスな問いなのです。

私たちは何かの行為をするとき、（それが役に立つかどうかなど）意味を考えて行為をしているわけではありません。例えば、この文章を読んでいる読者は、「今、何をしているの？」と聞かれれば、「文章を読んでいる」と答えるでしょうが、読んでいる最中に「自分は学生が書いた文章を読んでいるのだ！」と明確に/反省的に意識しながら、「読む」という行為に関わっているのではありません[6]。つまり、人間が何らかの行為の只中にあるときは、大抵の場合それに夢中になっているのであり、その行為の意味（つまり役に立つかどうか）は、それが問いかけなどによって中断されない限り、反省として現れてくることはありません。

「意味」が行為の中で隠れているという見方は、ウィトゲンシュタインの言語ゲームという考え方に重ねられるかもしれません。私たちは日常の中でさまざまな言葉を使います。そして、それぞれの言葉には意味があって、だから、コミュニケーションが取れると考えています。つまり、言葉には「意味」があるから、使用できるという考えです。しかし、ウィトゲンシュタインは、言葉は使用されることで「意味」を持つことになると逆に考えます。例えば、「窓が開いている」と言ったとしましょう。その言葉の文字通りの意味は、部屋などにある窓が開いているという単なる事実を伝えているだけです。しかし、もしこの発話が冬に部屋が寒い中で言われたとしたら、相手は窓を閉めに行くかもしれません。つまり、先述したような文字通りの意味とは違って、発話者の「窓が開いている」という言葉は「窓を閉めてほしい」という意味になるのです。だから、それぞれの言葉の意味は使用によって、決まるのであり、むしろ、言葉には何か固定的な意味があるのではなく、使用があるのみと言ってしまって良いでしょう。このような言語の在り方が言語ゲームと名付けられています。

---

[6] サルトルの『存在と無』において、身体論の一部で論じられる「前反省的コギト（cogito pré-réflexif)」の議論をベースにした。サルトルの主張から文脈的にやや外れているが、ここでの議論は「非措定的な意識」のヴァリアントとして捉えてもらいたい。

ここで、「言語」ではなく「行為」の意味という観点から、「行為ゲーム」なるものを考えてみましょう。私たちは日常生活の中でさまざまな行為をします。例えば、テーブルの上にお茶を持ってきたとしましょう。単にコップが重いからテーブルに置いたという理由がまず考えられるかもしれません。でも、そのテーブルに客人がいたとしたら、飲んでくださいという意味になるのではないでしょうか。その行為に対して、大抵の場合、客人はお茶を飲むという行為で応えます。あるいは口をつけなかったら、そのお茶が苦手ということを意味するかもしれません。あらゆる日常の営みがそうであるのと同じように、(カントが言うような) 哲学するという行為の意味だって、使用方法によってアドホックに生まれていくのです。

したがって、哲学をはじめとするあらゆる行為について、固定的な意味を求めることは原理的に不可能でしょう。誤解を恐れずに言うならば、人生における行為のほとんどは原理的にナンセンス[7]です。私たちは目的意識を持って行為をしていると思いがちですが、人間は生きるという名の下に「夢中」になってさまざまな行為を生み出しているにすぎません。ただ行為のみが意味とは無関係に流通し、その行為の連鎖に対して、その都度、結果的に/反省的に意味が見えてくるだけなのです。

行為の人生におけるこうした在り方から、僕は最近、人生に対して「虚無」と感じることが多くなりました。どうやら人は幸せになるために生きているのではありません。気が付いたときには、生まれてしまっていて、それらしい将来の夢を掲げて勉強をして、いつの間にか社会人になるのです。このように考えている自分も、大人になることを目的意識を持って考えているというより、気が付いたときには、このことについて考えていたのです。そして、この文章を書き終えてしばらくしたら、もう何を考えていたのかも忘れてしまうでしょう。人間はいつの間にか「行為ゲーム」に巻き込まれていて、何をしているのか、どんなゲームなのか分からないまま、ひたすら行為し続けているとも言えます。

しかし、この事態を指して「虚無」だと言うこと自体もまた虚無なのです。だから、徹頭徹尾、虚無であって、生きるのが嫌になっています。これをニヒリズムと言います。わずかに知恵がついてしまった学生が、ニーチェなどを読み耽り、虚無を超克して超人になろうと試みる、大変未熟な状態に僕は今いると言っていいでしょう。一方で、生きることには意味があるとか、何かを成すために人間は生まれたんだとかいう言説にはどうしても抵抗感を覚えてしています。だから、哲学が役に立つのかと問われたとき、僕はひどく、その問いに呆れてしまうのです。世の中に役に立つとか役に立たないとか、そのような固定的な意味はそもそもないし、人生は基本的にナンセンスなんだと叫びたくもなるのです。

---

[7] ここでの「ナンセンス」とは中立的に、意味が欠如している事態を指すが、この意味の欠如が生の充実感の欠如、ひいては虚無感へと「言語ゲーム」的に繋がっていく。

大人になるということ

冒頭で、最近、大人になることについて考えていると書きました。それはまず、僕自身がどうしようもないくらい、子どもだということを痛切に感じているからです。全ての学生とは言いませんが、少なくとも僕には、守るべき家族もなければ、仕事でどうしようもない理不尽に出会って思い悩むこともありません。健全に「思想が強い」学生であれば、僕も含めて理想主義的な思想家になってしまいます。そして、自分が掲げている理念が大変に素晴らしいもので、それを実現していない大人たちは「何も分かっていない」と罵倒するのが（主語は大きいですが）学生という存在です。東大紛争で全共闘の学生が、「労働者階級」の警官に火炎瓶を投げて「東大解体」と叫んだように、社会にもまれたこともない僕も、人生を分かったような顔をして、人生とはナンセンスなんだと勝手に嘆いているにすぎません。しかし、全共闘の学生やそれに共鳴した学生のほとんどが、消費社会へと溶け込んでいったように、「大人になる」とは社会の矛盾を自覚した上で、社会に内在していくことなのだと思います。それは決して社会に迎合することでも、社会の理不尽を許容することでもないはずです。むしろ行為ゲームの外から行為ゲームを冷笑することこそ子どもなのです。だから、行為ゲームの中で、どのような行為をするかを問うのが、大人なのではないでしょうか[8]。

今、僕は『バガバッド・ギーター』というインドの聖典をコツコツと読み続けています。その中には、戦うべき敵軍の中に顔見知りを見つけて戦いにひるむ王子アルジュナに対し、御者のクリシュナが次のように語る場面があります。

> あなたの義務は行為にのみある。決して結果にではない。行為の結果を動機とすべきではない。無為に執着してはいけない。（第 2 章 47 偈[9]）

この一節は、「行為の結果を動機と」して――つまり、意味を求めて――打算的な人生を歩むべきではないし、かといって無為に執着して、行為ゲームから外れるべきでもないと言っているのではないでしょうか。そしてクリシュナは、行為に専念することを説くのです。それは行為ゲームに集中すること、「夢中」になることを肯定するものかもしれません。

僕はここまで哲学は役に立つと言ってみたり、役に立たないと言ってみたりしてきました。それから人生の無意味性について論じ、ついには行為ゲームに没頭することを勧めようとしています。哲学が役に立つかどうかは、今やほとんど問題ではないのです。問うべきは、行為ゲームの中で、僕が何をすべきなのかということです。僕はこの問いに「哲学すること」と答えたいと思います。僕はこれまでのように、哲学を含め人生は無意味と喧騒して、虚無

---

[8] サルトルが言う engagement は行為ゲームへの哲学的従事と解釈することができる。

[9] कर्मण्येवाधिकारस्ते मा फलेवु कदाचना। मा कर्मफलहेतुर्भूर्मा ते सङ्गोऽस्त्वकर्मणि।। プーナ批判版を基に拙訳。

主義に陥るべきではないでしょう。そうではなく、これからも哲学することに没頭し続けることにしたいと思います。それは決して哲学が役立つからではありません。むしろ、哲学という行為を通してこそ、行為ゲームという社会に関わることができるからです。

だから、哲学は役立つのかという問いはもう終わりにしましょう。そして、社会の中で何がしたいのかと問われたならば、私は胸をはって、しかし謙虚に「哲学をします」とこれから答えていきたいと思います。（カントが言うように）勇気を持って、自分の頭で哲学すること―その行為はきっと、社会における無数の行為へと繋がっていくはずです。